

目次

1. 航空情報	1-2
2. 乗り物・道路情報	2-3
3. 政治情報	3-6
4. 経済情報	6-10
5. 日常茶飯事情	10-12
6. 都市事情	12-13
7. 教育事情	13-14
8. 海外移住・労働事情	14
9. 住宅事情	14-15
10. 女性事情	15-17

1. 航空情報

(1) タイ空港合理化

タイのスワンナブーム空港は2階が到着階で、入国者は入国審査ゲートへ向かい、国際線トランジット客は反対方向へ、うんざりするほど長い通路の突き当たりまで歩かされる。国内線乗り換え客はトランジット客と同じ方向の途中から左折する。3階は国際線出発階、4階がショッピングモールになっている。

3階の国際線出発階のA-G・・・各搭乗ゲートの前には、横一列に検査官が並び、X線検査と厳しい液体物検査があった。ところが、9月から12月までの間にチェック体制に大幅な変更があった。各搭乗ゲートが廃止された。そのかわり、3階に一括搭乗者検査室が設けられた。エレベーターもエスカレーターも、2階から直接4階には上がれない。誰もが、必ず、この検査室を通らなければ3階にも4階にも行けないようになった。その検査の厳しいこと！ジャケットやマフラーばかりでなく、靴まで脱がされる。空港職員さえ、3-4階に行くには検査を受けなければならない。つまり、人員削減と検査の集中強化という一丁二石の合理化策らしい。若い労働者が豊富な国のように見えたタイにも、そういう時代がきたのですね。

(2) タイ国際航空会社の合理化策

昔は、タイ国際航空機を使うお客は金持ちとされていた。スチュワーデスさんも美しかったし、お食事も美味しかった。それが、旅行が大衆化し、値下げ競争が激しくなるにつれ、どんどん食事が不味くなってきた。機内食に感激しなくなったということもあるけれど、失礼ながら、出稼ぎ労働者輸送機になって以来、「お食事」から「食べ物」へ、ついには「餌」になってきた。

その証拠に配膳トレイが小さくなった。以前のトレイは座席前の折りたたみテーブルの幅いっぱいのサイズだったが、今や、8割程度のサイズに縮小され、食器数が減った。デザートも、ケーキから、いくらでも増やせるゼリーになった。フルーツは、漂白しすぎのように、まったく味のないパイアとパイナップルとグレープ。パンは電子レンジでチンだから、クロワッサンもバターロールもカチカチで、金槌もつけて欲しいほど。クロアッサンなど持ったとたんに皮がバラバラに崩壊して、ナプキンがパン粉だらけになる悲惨さ。狭い座席に詰め込まれたブローラーに餌を与えるって感じ。こんなことなら、おにぎりを持ち込んだほうがマシ。食事は必要な人のみ有料にして、運賃値下げして欲しいし、体重+荷物で運賃をランク別にして欲しい。女性客に配っていた蘭の花のブローチも廃止になって・・・聞けば、タイ航空もタイヘンなんですよ。そうそう、バンコクーカトマンズ便はドバイまで延びるとか。本格的に出稼ぎ路線化の方針かな。

(3) 新ネパール民間航空会社投資者募集中

「アルパイン航空」という新しい航空会社が立ち上がろうとしている。日本とネパール間の直行便を運行しようと、投資者を募っている。社名を聞いて、一瞬、日本の代表的な旅行会社「アルパイン・ツアー社」が立ち上げたのかしらと思ったのだが、そうではないらしい。ネパール航空(NA)でドル箱路線だったカトマンズー関空路線が、旧ロイヤル・ネパール航空(RNA)内部の政治色の強い保守的な幹部たちに理解されず廃止に追い込まれたが、当時の担当者たちが、新社を立ち上げようとしているらしい。まだ、機体もないし、カトマンズ本社の職員も少数。でも、もう一度、カトマンズー大阪便(または羽田)を飛ばしたいという夢を追い

かけている。JALの機体を安く売ってくれるとか、投資をしたいとか、いつか航空会社を持ってみたかったというデカイ夢を持っている方、今がチャンスかも。

(4)カトマンズ空港サービス指導員

4月から、カトマンズ空港にJICAのシニア・ボランティアが空港職員のサービス指導員として赴任するらしい。2011年の「Visit Nepal Year」対策としては、泥縄だと思うけれど、やらないよりはマシ。でも、どこから手をつけたらいいのか、砂でエヴェレストをつくるようでしょうねえ。よく引き受けてくれる方がいたものと、感心しちゃいます。いっそのこと、全職員総入れ替えしちゃったほうが早いかもね。今から「ご苦労、お察し申し上げます」と言いたいほど。荷物運搬用カート(トrolley)の占有と手数料の強要は、第1に止めて欲しい。長期赴任して、ビシバシと訓練してくださることを期待しています。

2. 乗り物・道路情報

(1)タクシー料金

現在、タクシーの初乗り料金は10Rs。私の寄宿先はビジェシュワリの橋向こうで、スワヤンプーの麓だから、言ってみればカトマンズの街外れ。そこからパタンのサミット・ホテルまで、「お客さん、タパタリからですか、リングロードからですか？」と聞くので、「タパタリ方向へ行って！でも、タパタリまでゆくと渋滞しているから、テクへ右折して、バグマティ川沿いに走って、クポンドールへ抜けてちょうだい！」と指示をした。サネパのサミット・ホテルまで約20分走って170Rsだった。それを聞いた友人が「あら、安かったわね！私、チャクパットからサネパまで190Rs取られたわ！」。歩いて15分、バスなら10Rsで行けるのに。

別の日、カトマンズの東側にあるサンセット・ビューホテルから街を挟んでトイメン西側にある寄宿先へ帰ってきた。ちょうどカトマンズ市街の直径を渡る感じだが、ナヤバナシヨールの長い坂道を下り、シンガダルバール前からニューロードを通り抜けて裏道を走り、ビシュヌマティ川の橋を渡ってホテル・バジュラ前まで165Rsだった。反対にホテル・エヴェレスト(ナヤバナシヨールの交差点手前)まで行った時はタパタリ経由だったが155Rsだった。ビシュヌマティの橋の袂でおしゃべりをしていた運ちゃんに「ナヤバナシヨールまで、行ってくれる？」と聞いたら、「300だ」と言われたので、橋向こうまで歩いて別のタクシーを拾った。それだけで、半額になった。夏には、マハラジガンジからビジェシュワリまで163Rsだったから、カトマンズ市街の端から端まで、目安として200RsあればOKということかな。空港からは、距離から言えば、タメルまで150Rsが妥当だが、空港タクシーは特別値段なので、500Rs取られた人もいるらしい。

(2)気の弱い運転手さん

ある日、ボドナートからタクシーに乗った。ボドナートはリングロード沿いのパシュパティナートの脇、グジェシュワリから右折して最高級ホテル・ハイヤットの前を通り、空港の滑走路の北側に位置するので、街の中心からはかなり遠い。その先のカパンなどの新興住宅地から通勤している人もいるので、一本道はいつも渋滞している。少なくとも、街中まで30分以上かかる。

その日、運転手さんは、メーターでなく「250Rs」だと言うので「シメタ！」と思って先払いした。座るやいなや運転手さんは好奇心に満ちた質問を集中砲火のごとくあびせてきた。ついでに家族の自慢話も延々と続いた。二人の子どもの教育のために、バンコク、ドバイ、マレーシアと、様々な国に出稼ぎに行き、バンコクがとでも気に入っているとのこと。だが、彼の世界地図には日本が載っていないらしい。それはいいとして、質問中は運転スピードが落ち、ハッと気付いて急に早くなったりする。前の車とあわやドン！といきそうので、眠くても眠れない。前の座席の下に両足を踏ん張り、手すりを片手でしっかり握って、イザという時は少しでも衝撃を減らそうと臨戦態勢だった。

10階以上の高層アパートが林立する夕暮れのボドナート前の渋滞を抜け、パシュパティナートのリングロード交差点を越え、旧王宮の裏手の塀沿いを走り、マツラ・ホテルの前を通る頃、「お客さん、ビジェシュワリは遠いや・・・」と言い出した。「そらきた、値上げ交渉だな」と察して、聞こえなかったかのように空トボけた。そうこうしているうちに、バラジュ方向へ坂を下り、途中から左折してビジェシュワリ寺院方向に向かった。な～んだ、ちゃんと道順を知っているじゃん！どう、考えても、メーターなら400Rsにはなっただろうに、先払いでもらっちゃったから、それ以上言えなかったのね。もう一押しすれば、もしかしたら……。めずらしく、気の弱い運転手さんだった。

(3)8時半から5割増し

カトマンズの空気汚染、いつも渋滞で精神衛生上も良くない中で働く運転手さんも気の毒よね。それで、月収は5000Rs(約6500円)が精一杯だって。200Rsくらい稼ぐより、運転手仲間とのおしゃべりのほうが楽しいでしょう。夕暮れ5時ごろになると、いつもは4-5台止まっている交差点付近のタクシーが、1台もい

なくなる。カトマンズの勤め人は10時出勤4時退社だから、タクシーも帰宅時間なのかしら？8時半からは、深夜5割り増し料金になる。エ〜ッ、8時半から！！そうなのです。健全な街カトマンズでは、4-5時は、勤め帰りの買い物客でごった返すが、9時になると、人影まばらになってしまう。それ以降、お仕事やお遊びのある人は、原則として、バイクや自家用車を持っている金持ちということになるのだ。

(4)馬場喜代志さん、ご苦労様でした

2010年1月6日、JICAのシニア・ボランティアとして、カトマンズの交通警察官を4年間にわたって指導してきた馬場さんが、帰国なさった。彼は、大阪万博の交通整理計画を指揮なさった経験を買われたそうだが、その指導力だけでなく、心意気のすばらしい方だった。

ナヤバナショナル交差点の交通規制を、見事にコントロールしたこと。タパタリの橋の前の交差点を、女性警官に任せていたこと。交通頻繁な道路に黒と黄色の斜線が塗られた中央分離帯ブロックが設置されたこと。横断歩道ができたこと。交通警察官が白い手袋をするようになったこと。夜の検問が厳しくなり、交通違反切符が切られるようになったこと。交通警察官が、デレデレせずに、背筋を伸ばして、自信をもって仕事をするようになったこと・・・

何より、カトマンズ市民に、時には面倒でも交通ルールは守らなければいけないという意識が生まれたのは、すばらしい！本当に、馬場さんが赴任してから、カトマンズの街が混雑しているとはいえ、以前に較べればルールができてきた。この功績は、素晴らしいものだ。そして、お偉いさんでも、違反は違反と、厳しい対応をしたのは、彼がはじめてではないだろうか。

ずっと、サンセットビューホテルに、ご夫妻で住んでいたが、停電に合わせて夜中に起きて仕事をしていると言っていた。警察の中で、何の権限もなく、最下層におかれている交通警察官の待遇をよくしようと、私財を投じて改善し、部下を可愛がった。また、最後に、中央分離帯ブロックを私財で作って、一人でペンキを塗り、ロープを張って設置して行った。カトマンズ交通局製のブロックは、頭が△だが、馬場さんのブロックは頭が丸い。馬場さんは、仕事をやりきって、ネパールを去った。2010年1月24日(日)の朝日新聞に掲載。

3. 政治情報

(1)バンダ(交通ストライキ)と緑色ナンバープレート

12月21日は、バンダだった。「Tourist Bus」と書かれた、緑色ナンバープレート(新しくできたらしい)のバスしか運行が許可されていないので、自宅に帰るには5星ホテルに向けて、いくつかのルートを巡回するバスに乗るしかない。30分に1本というが、そんなに正確に来るわけがない。とにかく、人間も荷物も早い者勝ちでグチャグチャに詰め込まれて、旧王宮通りのアンナプルナホテルで下ろされた。その先、でこぼこの山坂道を30分もスーツケースやザックを背負って歩くわけには行かない。どうしろってゆうのさ！

しょうがないから、警察の某氏に電話をした。しばらくしたら、ライフルを持った武装警官4-5人を同乗させた幌付き小型トラックがホテルの玄関口に現れ、お家まで送り届けてくれた。警官が下りる際に、ライフルを差し出したので、ホイッて、受け取ってあげようと思ったら、他の警官が慌てて銃を受け取った。やっぱり、実弾入りのライフルだから、暴発したら、タイヘンなものねえ。

「警察のお偉いさんだから、失礼かしら？」と、内心思ったのだが、相手に向かってナマステと合わせた手の間に、お駄賃がチラッと見えるようにして挨拶をしたところ・・・満面の笑みとともに阿吽の呼吸で握手を求めてきたので、誰にも見えないように掌へスリと受け渡し完了。これが、ネパールでよく行なわれるスマートな感謝の表現作法なのだ。あちらの方は、皆さん慣れていて、受け渡しがとても上手。今回は、「困っている外国人を保護する為の任務遂行」という名目が成り立つ(?)が、警察車両はタクシーではないので、良い子の皆さんは決して真似してはいけませんよ！

ちなみに、ネパール人の友人は、3つもスーツケースを抱えて、Tourist Busに乗れるまで、空港の外で2時間も待っていたそうです。これが、カトマンズに着いて、迎えもなく、いきなりバンダだと言われたら、観光客は一生トラウマになって、2度とネパールへ来ないでしょう。

*車のナンバープレートの見分け方。「黒色」プレートの車しか、手を挙げても止まってくれません。赤色＝自家用車。黒色＝タクシー等営業車。青色＝外交官、国連機関専用車。青+赤＝政府公用車。緑色＝観光客専用車。

(2)金の所在

12月21日のマオイストによるバンダは、FNCCI(ネパール商工会議所連盟)の会長が「no work, no pay =働かざるもの、賃金なし！」と宣言したのに反対したもので、彼が所有する工場を爆破し、バンダを決行した。そのスローガンは、「デモに参加した者にも賃金を支払え！」だった。

資本主義の三要素は、労働、資本、土地である。ネパールのマオイストは、毛沢東の社会主義とは異なり、鄧小平の資本主義経済を進めているのだから、労働者が働いて企業の利潤を得なければ賃金は支払えないという、単純な論理を理解してなければいけない。マオイストの指導者層は、もともとブラーマンが多いし、土地所有、蓄財に明け暮れ、何度自粛令がだされても馬耳東風である。

ところが、労働者は、長年貧富差が大きいカースト制社会で育っているから、企業や外国からは、金をいくら取っても、取っても、尽きることがないと思っているらしい。労使ともに過激だから、長時間かけて交渉し、妥協点を見つけるなどという面倒なことはしない(八百屋での値段交渉はするけど)。いきなりバンダだし、企業もロックアウトで会社や工場を閉鎖してしまうこともある。どれだけ大きな経済損失をしていることか！しかし、留学が選りの若造経営者が、労働者が一生食べても余るほどのダイヤの指輪を無造作にはめているのを見れば、無尽蔵だと思っても当然。なぜ、彼らの指輪代を稼ぎ出してやらねばならないのか、理解できなくて当然だろう。

(3) アンチ・フェイタリズム(反宿命論)

2010年1月1日は、ジャナモルチャ(党首アミック・シェルチャン タカリー族)のバンダで始まった。スローガンは、「アンチ・フェイタリズム！」。新年そうそう、寝ぼけてんじゃないよ！今更、何を言っているの？誰が、そのスローガンを理解し支持すると思ってるの？

1991年に、D.B.ビスタ先生が「Fatalism and Development: Nepal's struggle for Modernization＝宿命論と開発:ネパールの近代化への苦闘」という本を出版した。外国人研究者からは支持を得たが、予想どおりブラーマン層から激しい批判が浴びせられた。ビスタ先生は、ネパールの社会を悪くしているのは、ブラーマン・チェトリ等上位階層が権力と経済的優位を独占し、それを維持するために宗教を利用して「人間の格差は生まれる前からの宿命なのだ」と騙してきたからだ。そのことが、ネパール社会の開発を阻害していると、当時あっては「決死の覚悟」で書いたものだ。

ネパールを愛し、丘陵の人々(いわゆるジャナジャティー)こそネパール本来の人々であり、彼らに力を与えなければネパールは前進しないと、常々話していた。今、生きていらっしやったら、革命の神様に祭り上げられていたかもしれない。本人は、コミュニストが嫌いだったけれど、主張していることは共通している。もし、あの頃、政治家が、そのことに気付いて、タライの人々やの丘陵の人々に活躍の場を開き、開発の恩恵を与えていたら、今回の革命を回避できたかもしれない。

しかし、「アンチ・フェイタリズム」バンダは、納得できない。宿命論的社会を踏襲してきたのは、デモをしている人々自身でもあるわけだから、被害者面してバンダをして、多くの人々に迷惑をかけるのは、おかしくないか？まして、カースト制度の恩恵を享受して裕福に過ごしてきた人々が指導者だなんて！1月10日もジャナモルチャのバンダで、日本大使館の新年会が11日に延期された。1月24日からはマオイストの無期限バンダが予告されている。バンダは、ネパールという井の中の人々の、欲求不満のはけ口か娯楽感覚になりつつあるのだろうか？

(4)バンダを「環境浄化デー」にしよう！

1月1日の初日が昇るころ、いつもの車やバイクの音がしない。「ああ、お正月からバンダなんだ。いったいこの国の政治家は、この国の将来を、どう考えているのだろうか？」と、偉そうに、ブツブツ。「べつに一！フツーじゃねえ！」。そうか、日本だって、そんな先のこと考えて政治やっている人なんていないから、同じか。

バンダの日の街は車の騒音と排気ガスが無く、大通りの真ん中を歩けるから、とても気持ちが良い。働かないことが美德のネパールでは、市民も楽しそうな表情だ。腹が立つのは、バンダともなれば、警察を含めて官庁の役人や学校は率先して休みを取ることで。一般企業は休みではない。ビジェシュワリからパタンのチャクパットまで、テクテク歩いて50分ほど。車では、人間の目にはキャッチできないものがたくさんあることに気付く。

そこで、提案！バンダをしても良いが、月2回の日曜日に限定する。この日はノーカーデーで「環境浄化デー」とする。この2日は若者の欲求不満解消、ガス抜きのため、バンダのし放題とするが、シュプレッヒ・コールのみ。投石や爆破はダメ。一方、市民は肥満体解消のため、歩かねばならない。旅行者も、その日はなるべく到着や出発を避けるような日程を組んでいただく。こうすれば、空気はきれいになり、ガソリン消費量が減り、市民は土日の連休を楽しみながら体力増強ができる。ついでに、全国民が街や川のゴミを清掃する日にすれば、もっと良い。ゴミを集めた量によって、報奨金を与えても良い。きっと、世界中から「環境先進国」として、賞賛されるに違いない。日本政府の提案としたら、いかがかしら？

(5)COP15: ネパール首相の豪遊

ネパールの役人は、外遊(タダ飯)が大好きだ。12月9日から14日まで、マダブ・クマール・ネパール首相

以下8名の閣僚と、12名の制憲会議委員を含む60名余りのネパール外交団が、コペンハーゲンで開かれた世界環境会議(COP15)に参加した。どの国の参加者より多数の外交団であったようだ。何も成果はなかった茶番劇だと悪評の会議ではあったが、ネパール外交団にとっては、1週間の観光ツアーだった。コペンハーゲン以前に、ネパール首相は、インドを訪問したが、その際にも随行員が60名を越え、出発日には街の交通が遮断され、各国大使がお見送りに行くという、かつての国王の外遊スタイルを踏襲した。

「な〜んだ、プラチャンダをはじめ、結局政治家は国王になりたかったのね」9月になって、ようやく決まったばかりの国家予算を、3ヶ月で全部使い切ってしまったとか。日本国家予算は前半ケケケチ使い、年度末前に不用な物でも出入り業者から納入させて1円まで帳尻を合わせるのと、正反対。あればあるだけ「使ったが勝ち！」。だって、いつまで内閣が続くかわからないものねえ。後継内閣に予算が無くて、知ったこっちゃないというわけですね。

(6) 念願の胡錦濤主席に会えて、お土産もいっぱい！

ネパール首相は、コペンハーゲンから帰ってきて、バンダ続きのネパールなど意に介さず、12月26-31日に再び36人の随行員を連れて中国へ出かけていった。今回は、温家宝首相や念願の胡錦濤主席に会えて、お土産に、大々的な中国からの経済協力を約束してきた。既に中国政府は電力、道路などのインフラ整備、空港、農業セクター、青少年の交流等の「痒いところに手が届く援助」を行なっている。そのかわり「チベット・台湾・ウイグルは一つの中国」を支持させ、「対インド政策の最前線」として活用しようとしているのが見え見え。こうして首相が大名行列で外遊している間、国内の政治は概ね休暇状態になる。

「日本人は、何のために、あくせくと働くのか？」⇒「将来、安楽な生活が出来るようにするために」
「ネパール人は、なぜ働かないのか？」⇒「今までどおり、楽しく暮すため」。

どうみても、ネパール人の勝ちですね！

(7) ゴミ戦争と地方自治体

3年前に総選挙が行なわれ、マオイストが大勝し、王制が崩壊したが、その後、地方議会選挙は行なわれていないため、45県、75郡、市町村の議会が動いていない。カトマンズ市長も不在で、事務代理をマオイストから送り込まれた人が代行しているに過ぎない。

カトマンズのゴミ処理は、一向に解決しない。既にビシュヌマティ川は兩岸からゴミで埋まってきて、渡ってしまえるほどになった。遠くの白く美しいヒマラヤの山並みから、ズーと目線を引いてくると、足元の川に黒いゴミのビニール袋が堆積し、悪臭が上ってくる。

ゴカルナのゴミ焼却場が満杯になり、トリスリ近くのシズドレ最終処分場に移ってから10年もたらずに満杯である。その間、焼却場を引き受ける村に、学校施設その他の優遇措置を約束したにもかかわらず、政府は履行しないため、住民はたびたびストライキを起して、ゴミの受け入れを拒否している。

こうなったら、数十億円かかるらしいが、高熱焼却炉を設置するしかないという声が聞こえてくるが、政府は「その前に、社会福祉など、する事が山積していて、優先順位は低い。10年以上先の話」と言っているようだ。それなら、さっさと社会福祉や道路建設に取り掛かれれば良いのに、結局、外国の援助でナントカしてくれるのを待っているだけなのだ。悪臭も、大気汚染も、水不足も、停電も、日常化して五感が麻痺してしまえば、感じなくなるのだろう。

(8) G. P. コイララ大統領誕生(?)

政治家の合従連衡など秦の時代から、日常茶飯事だけれども、ここへきて、UMLのオリとプラチャンダが近づいてきた。従来、UML内部でオリは強硬な反マオイストとして主流派を率い、若手のカナルはマオイストと手を組まなければ国政が纏まらぬと主張してマオイストとのブリッジになってきた。ところが、立場が逆転したようだ。どうも、「G.P.コイララにノーベル賞を！」と、UMLを中心としたネパール政府と कांग्रेस党が合意し、外務省内に委員会を設置し始めた頃かららしい。ということは、妖怪G.P.コイララ氏の天の声が、響いてきたということか。「マダブ・ネパールはダメ、使えない」と評価が一致しているから、オリにとって何やら、おいしい話があったのかな？不思議なことに、日ネ協会で歓迎会を開いてあげた政治家は、必ず良運に恵まれるみたいよ。お払い料をいただくかしら……

1月9、10日に、私的に政財界人と会談をもったが、かなり楽天的な見通しを聞かされました。

①1月24日からのバンダは、行なわれないか、行っても小規模に止まるだろう。

②5月28日に憲法は制定される。そのための憲法制定作業委員会が動いている。UMLの若手議長ポカレル氏の話によれば、この2ヶ月で作業が進むとのこと。財界人も、同じ意見でした。

③向こう2ヶ月で、ほぼ和平交渉は進む。「血の4月」を思い起こし、また何か起こると不安になったり、半ば期待しているものもいるが、それはない。和平プロセスは進んでいる。

- ④最も柔軟に対応できるのは、プラチャンダである。
- ⑤憲法制定後、新憲法に基づいて総選挙が行なわれ、地方選挙も行なわれて、少なくとも2年間社会は穏やかになるであろう。
- ⑥ノールウェー初め、スカンジナビア諸国は、マオイスト支持。そのことで、ビジネスが伸びている。
- ⑦ネパール最大銀行の CEO はじめ、財界人の多くはマオイストであり、中国寄りである。
- ⑧マオイスト軍とネパール国軍の統合も、スムーズにゆくだろう。
- ⑨G.P.コイララ大統領、プラチャンダ首相の可能性あり。

先ほど、ネパール大使館からの「安全情報」が届き、25 日からマオイストが無期限バンダを行なうから要注意とのことだったが、政財界はハイレベル政治メカニズムで調整がつかずと、楽天的見方をしている。

(9)マオイスト軍のこれから

1月7日から、7箇所のマオイスト兵士収容所から、UNMIN(国連軍監視団)によってネパール軍との統合に際して資格のない 45%のマオイスト兵士(和平協定締結後に兵士になった者、児童兵士など)が故郷へ帰還することになった。それぞれに、22, 000Rs の補助金(10, 000Rs は国連から、12, 000Rs は政府から)を支給され、子どもを抱えた女性兵士を含む若者たちが、バス停へ向かった。帰郷後のリハビリとして、教育の機会や職業訓練機会等がパックで与えられている。今後、村でマオイストの宣伝員として活動する者、もう政治に関わらずに母親の手伝いをしたいと言う者、各人に大きな傷を負っているのではないだろうか。

和平プロセスの大きな鍵となっていた、マオイスト軍と、ネパール国軍の統合問題も、解決の方向で動きはじめたと期待した途端に、またバンダリ国防大臣が、せっかくの和平プロセスをぶち壊すような厚狭な暴言を吐いた。「やっぱり、女は・・・」といわれそう。

マオイストに対する国民の信頼と期待が急速に失われてきているが、それでもマオイストを入れない政治は成り立たない。マオイストが以前ほど強気で、バンダを強行できないのは、その辺を察しているのだろう。

(10)C.P.ガジュレルは国際集金人(?)

2月に、また C.P.ガジュレルが来日する。すでに3回目である。オフィシャルな招待ではなく、日本在住のマオイストが身元引受人となって、個人的に招いてくれるのだ。彼は、まだテロリスト・リストから外されていないので、アメリカへは入国できないし、日本のイミグレーションでも、一応「別室へどうぞ」と、言われることになる。だから、来日予定を立てたら、早速、日本大使館でビザ申請をしないと、今日申請して、明日ビザが出ると言うわけには行かない人物なのだ。彼は、必ず東京と大阪へ行き、名古屋へ寄る。いつの間にか、日本は、マオイストにとって、安全かつ大きな資金源になっているのかもしれない。

そういえば、昔、UML の有名な人権活動家で日本人の研究者層にファンが多い有名な R.T.氏が、健康チェックで明日日本に行くから、今日ビザを出せと偉そうに日本大使館へやってきた事があった。ダサイン休暇中は、どこの大使館もビザの発行はしない。館員も海外へでたり、国内旅行に出て不在者が多く、留守番職員しか居なかった。今日中には手配できないと説明すると、大使館の庭で、大声で罵倒しはじめた。しばし眺めていたが、「こんな人が、有名な人権活動家だったのか」と、驚き、あきれたことを思い出す。

(11)マオイスト支持の中身

TAXIの運転手さんに、「最近は、どう？」と聞くと、選挙前は興奮して、「こんどこそ、俺達のことがわかってくれる政府になる。なに、王様なんていらない！」と、まるで、プラチャンダになったかのように大声で話す人が多かった。そして「良い国にするって言ってんだから、1 度やらせてみよう。他政党は口先だけで、どれもダメだったから」と、選挙を楽しみにしていた。選挙でマオイストが大勝した際は、鬼の首をとったように、「これから、俺達の時代が来るぞ」と、喜んで居た。1990 年民主化の総選挙後に、中産階層の人々が期待した喜びの言葉と、同じようだった。

しかし、しばらくすると、「まあ、しばらく様子をみましょう」と、トーンダウンしてきた。昨今は、誰も意見を言わなくなった。「やっぱり、ダメだねえ」「期待していたんだけどねえ」と、楽天的に残念を口にだす人もいない。運転手のみならず、よほどの身内で無い限り、その話題はタブーなのだ。誰も口を硬く閉ざしてしまう。

現在、マオイスト支持者の半分は、「報復が怖いからYESというしかない人々」だという。マオイストを批判した女性ジャーナリストが崖から突き落とされた。12 月のバンダの際も、FNCCIの会長の工場が爆破された。マオイストは武器を持った政党だ。あらゆる職場に、親戚にマオイストの目が光っているように感じる監視社会である。楽天的なネパール人たちに見えるが、実は「コワイ」と言う。海外留学や出稼ぎに行った娘や息子に「帰ってくるな」と言う。外国に居れば安全だと。でも、そうでもない。日本にいる女子留学生が、「なぜ、私の携帯番号を知っているのかわからないけれど、しょっちゅう電話でマオイスト集会へ、しつこく誘

うの。断ると、なぜ出ないのかと声を荒げる。」と、話していた。それって、民主主義社会じゃないでしょ。

4. 経済情報

(1) 外国為替 No Commission

タメルには両替屋がたくさんあるが、どこも「No Commission(手数料無料)」と書いてある。でもね、1月4日の新聞に掲載された為替レートは10円=8.06Rsで、つまり、1Rs=1.24円だった。ところが、タメルの両替屋レートは、どこも10円=7.64Rs。つまり、1円=1.30円だった。どこが、No Commissionなのよ！ちゃ〜んと、4.6%の手数料を取っているじゃない！

そんな時は、お店で買い物をして、直接「円払いでいい？」と聞くと、店員は新聞を見て、10円=8.06円で計算してくれるのです。僅かと言えば僅かだけど、フェアな気分になるでしょ？まあ、その分、価格に盛り込まれているって言われれば、それまでだけど、商売は気分だから。

(2) ユニクロ出店待望論

ヒートテックの下着(990~1500円)は薄くて温かい。また、270gのダウンジャケット(5000円)は軽くて、温かくて、小さくたためる便利さで、旅行の必需品だ。

昨年、ユニクロが、バングラデシュに進出することが決まった。中国の2社に加え、バングラデシュ企業1社と共同で、バングラデシュで衣料品の製造工場を運営する合弁会社を設立する。そのため、昨年9月に駐在事務所を開設した。近々インドにも進出し、メイド・イン・インドで、生産される可能性がある、プレスリリースした。ユニクロがSAARC域内に進出したことは、ネパールにとって関税の面からも朗報である。

賃金が安く、ノクシカタ刺繍の上手な器用な女性労働者がたくさん居る。彼女達はムスリムなので、外出する事が難しいが、大半が女性の労働者なら、働くことが出来るだろう。インドが牽引する南アジアの経済成長は目覚しく、GDP成長率はインド7.6%を筆頭に、スリランカ、バングラデシュも5%程度に上がっている。ネパールは3.2%だが、日本のマイナス成長に較べれば、羨ましいほどだ。

ところで、ネパールの住居は、家の中がとても寒い。冬の陽射しを室内に取り入れるような設計になっていない。さらに、建築ブームで、見てくればかり良いコンクリート住宅や大理石住宅が増え、人々は室内で、沢山の衣類を着たり、ショールや薄手の布団のような布を巻いている。特に、一日中家に居る女性が住み易い造りになっていない。台所は土間やコンクリートで冷たく、多くの女性が腰の冷えに悩んでいる。最近でこそ、サリーの下にタイツを穿き、パンツスタイルも増えてきたが、それでも冷える。ヒートテックは、そんな女性たちや老人にとって、ひとつの朗報となるであろう。

法律は、女性の権利を高らかに謳っている。しかし、依然として男性優位のネパールでは、女性が生活の場でどのようなことを望んでいるのか、何に苦労しているのか、考えてみようもしない。これからのビジネスは、女性に焦点を当てれば、儲かる。

(3) 花王さんも、カトマンズに出店してください！

ネパールの人々は、強烈な香が好きだ。中世のフランスのように、悪臭を消すためであろうが、何事にも強烈な臭いがする。開店早々の店に入ると、ブ太っといお線香の煙がもうもうとたちこめ、狸でなくとも燻ぶされて尻尾を出しそうになる。香は苦手だ。

それで、私は資生堂より無香料の花王のほうが好きというわけ。香が強く、DFでも名の通った資生堂のほうがブランド大好き中産階層に好まれること確実なのだが、残念ながら資生堂は平成18年に生理用品事業をユニチャームに譲渡してしまった。だから、化粧品と生理用品の両方を扱っている花王に進出して欲しい。ユニチャームは、ベトナムに既に工場を建設し、インドにも計画している。しかし、人口の半分の女性を対象に使い捨ての環境に優しい生理用ナプキンを、処理施設も無い国に販売するのは、「エコ先進国(?)」の方針に反しないか？

途上国なら、何でもありなんて、アメリカの農薬販売のようなことを言わないで！今まで使っていた布ナプキンを、可愛く上手に使うようにさせたい。そのためにも、生理用ショーツは普及させたい。女性の社会進出には生理の煩わしさを軽減する必要があるのだが、男性にはわからないだろうけど、察することはできるでしょ？また、確実な避妊によって、女性が自分の体をコントロールできるようにする様々なグッズの恩恵も、ネパール女性に知らせたい。それに、冬、暖房器の無い室内で震えている女性に温かくてファッションブルな下着を提供したい。そんなショップを開く方、いないかしら？

自分で開けば？ そうしたいけど、先立つものが……

(4) 銀行家とダイヤ

ネパールで多すぎるものは、新聞と銀行。

【国立中央銀行】Nepal Rastra Bank

【商業銀行】①Rastriya Banijya Bank、②Nepal Bank Limited、③Standard Charter Bank、④Nepal Bangladesh Bank、⑤Himalayan Bank Ltd、⑥Bank of Kathmandu、⑦Nabil Bank、⑧Kumari Bank、⑨Nepal SBI Bank、⑩Siddhartha Bank Ltd、⑪Everest Bank Ltd、⑫Nepal Investment Bank Ltd、⑬Nepal Credit and Commerce Bank Ltd、⑭Lumbini Bank Ltd、⑮Laxmi Bank Ltd、⑯Nepal Industrial and Commercial Bank Ltd(NIC)、⑰Global Bank Ltd、⑱Sunrise Bank Ltd、⑲Machhapuchhre Bank Ltd、⑳Agriculture Development Bank Ltd、㉑Citizens Bank international Ltd、㉒NMB Bank Ltd ㉓Prime commercial Bank Ltd、㉔Bank of Asia Nepal Ltd、㉕Development Credit Bank Ltd、㉖KIST Bank Limited、etc.

【開発銀行】

【協同組合銀行】

ネパールへ行くたびに、新しい銀行ができていく。タライへ行くと、地域限定の銀行がたくさんある。学生たちは、昔は「ドクターかエンジニア」になりたいと言ったが、今は「国連か銀行かINGOに勤めたい」という。つまり、商業銀行は儲かる、美味しい職業なのだ。

ちなみに、係長レベルで、月給 50 万 Rs(約 65 万円)くらいだそう(学校の正規教員が 8000Rs(1万円)くらい)。ネパールの最大手銀行の頭取は、月給 300 万 Rs(約400万円)で、自宅の水道代、電気代、電話代、ガス代、ガソリン代、雇用費用、パーティー経費・・・etc.全て会社経費として銀行に払わせているそう。彼の趣味は「世界一高価な時計を蒐めること」なので。おそらく、生活費を1Rs たりとも自分で払ったことは無いだろうと、友人の銀行家が教えてくれた(日本だと特別背任罪って云うのだけ)。

その次に大手の銀行の頭取は、月給 220 万 Rs(約 300 万円)で、首相と同じくらいだそう。その友人だ、奥様は 7.9 カラットのダイヤの指輪をなさっていて、億円はするそうですよ。

ちなみに、国立銀行の月給は十分の一くらいだそう。

(5)カトマンズの中国建設会社

数年前まで、建設現場の足場は竹で組まれていて、チョー怖そうな風景だった。香港の高層ビル建設現場も竹の足場だったので、「アジア文化だなあ」と、ほのぼのしたもの。ところが、気がついたらカトマンズの街中の建設現場の足場は、鉄パイプになっている。それは、地元建設会社でなく、すべて中国の建設会社だという。

中国は道路、ダム建設、国際会議場はじめ、たくさんの ODA を行い、その労働者は全員中国から連れてくる。つまり、ネパールには建設による雇用機会や経済効果を与えない。さらに、プロジェクト終了後は、労働者をネパールにおいて行く。彼らは、ネパールの企業と合弁で会社をつくり、ネパールに定着して行く。そんなわけで、カトマンズの中心街スندگانラからトリプリショナルにかけて、大きなチャイナタウンが出来上がった。カトマンズ市教育局の隣は、たしか、奥の方に女性省関係の庁舎があったはずだが、中国博物館になり、現在は、大通りに面した一等地に、巨大なショッピングモールの工事中だ。その隣のビンセン・タワー周辺は中国製品の露天商が道路の両側や歩道橋の上にシートを並べ、歩けないほどの混雑。「ティンタノッペ、ティンタノッペ！(3つで90Rs)」「デュイソサッター、デュイソサッター！(270Rs 270Rs!)」と、夕方になるにつれて御徒町のアメ横のような呼び声が高くなる。

タメルのホテルもレストランも、中国語が増えた。旅行者が前年比 68.4%増だ。ネパール人に対して偉そうな態度を取るインド人への反発もあって、概ねカトマンズの人々は、中国人に対して好意的だ。

(6)中国の狙いはヒマラヤの水源

中国とネパールを繋ぐ道路建設が活発化している。すでに、ジリ⇒チベット、コダリ⇒チベット道路からは大型トラックが毎日安い生活物資を大量に運んできていく。加えて、ラサ⇒カトマンズ道路が急ピッチで建設されている。今年になって、中国政府はチベット⇒ローマンタン⇒ツクサン⇒ポカラ、チベット⇒ダウンチェ⇒トリスリ⇒カトマンズの3つの道路建設を発表した。合計5本の舗装道路がチベットとカトマンズを結ぶことになる。注目点は、矢印の方向で、チベット⇒カトマンズの一方通行であって、カトマンズ⇒チベットではない、ということだ。

ビレンドラ国王の戴冠に合わせて中国が建設したコダリ道路は、「チベットから半日で戦車がカトマンズに入れる」ことを理由に、インドが道路幅の拡大と直線に大反対した。しかし、今や、インドは何も言わないし、言ったところで中国は気にしないほど巨大な力を持っている。すでに、ネパールは中国の経済圏にあり、インドと中国のクッションという役割は不必要になった。中国が目差しているのは、ネパールではなく、北インド経済圏であり、世界の半分を中国経済圏にすることだろう。

「チベットは清皇帝に対して朝貢をしていた。属国であったのだ。だから、歴史的にチベットは中国の固有の領土である」と中国は主張している。その論理を適用すれば、「4世紀から9世紀のリッチャビ王朝は、

チベット皇帝に対して朝貢し、アンシュバルマ王は娘ブリクティをチベット皇帝に嫁がせた。だから、歴史的にネパールはチベットの属国であった、そのチベットは清朝の属国であったから、ネパールは中国の領土である」という三段論法が成り立たないとも限らない。

中国が欲しいのは、ヒマラヤの水である。ネパールを手に入れることより、ヒマラヤの水源を中国領にすることが重要なのだ。すでに、エヴェレストは、毛沢東時代に両国の国境ということに決めた。50年後には世界中で水の争奪戦が想定されている。ヒマラヤの水源を手に入れることで、同時にインドを干上がらせ、中国に屈服させることができる。ネパール国内の水利権は50%をインドが握っている。さらに、ヒマラヤの河川は、ほとんどがガンジス川へ流れこみ、北インドの数億の人々を潤している。

古来、水を治める事は、国を治めることを意味した。中国の遠謀術数を、日本の政治家は読めていないだろう。「奈良時代、遣唐使が朝貢していたのだから、日本は歴史的に中国の領土」と、明日は我が身か？

(7)人材派遣協定の虚々実々 part 1.

2003年12月3日に、ネパール・日本研修生協定が、ネパール労働省と独立行政法人国際研修協力機構(JITCO)との間で調印された。それに対して砂糖に群がる蟻のように、ネパール人材派遣業者が押し寄せた。一攫千金・大もうけできると思ったのだ。しかし、この制度の窓口となるFNCCI(ネパール商工会議所連盟)は、日本語や日本事情に関する事前研修を業者が行わねばならない、どうみても採算が取れないと消極的だった。一旦、群がった蟻も、サーッと、波のように引いてしまった。

それから5年。タマン大使は、何とかその制度を実現しようと、ネパール労働省やFNCCIに働きかけた。ネパールは19世紀から海外出稼ぎ労働者の送金が、経済を支えてきた国だ。出稼ぎが若者の一つのライフスタイル化したとさえ言える。だから、安定した出稼ぎ先を確保するのは、大使の重要な役割とも言える。

ちょうど、ネパールで、ドバイもマレーシアも韓国も海外労働市場が冷めてきたタイミングで、日本の研修制度が再浮上し、2009年10月24日～28日にネパールの労働大臣、労働省事務次官、課長が来日してJITCOやJICA、日本政府と会談をした。噂は千里をかける。斡旋業者の登録は172業者になった。

一時、日本経済低迷で、カトマンズにある80校の日本語学校は、経営が苦しくなった。同様に、日本の日本語学校業者も、中国人の入国が厳しくなった影響で、誰でも良いから、外国人研修生を獲得したかった。両者利害が一致し、日本語学校は、3ヶ月コースを設置した。トリバン大学のビサバサ語学キャンパスだけは2年コースで、出稼ぎ専用コースは設けていない。日本語学校は、この3ヶ月出稼ぎコースの受講生が日本大使館からビザを発給してもらくと、20万～50万Rsの「成功報酬」を受け取る。これが、最も効率の良い収入源である。

さて、2010年2月初めに JITCO 職員がネパールを訪問することになり、FNCCIとネパール政府は、ネパール国内での事前研修内容を決めた。

①ネパール国内での研修:日本語＝読み書き 60日(90時間)、会話 60日(90時間)、専門用語6時間(3日)

日本文化＝30時間(10日)、日本の食事 30時間(10日)。受講料 7000ルピー

②日本国内での研修:職業研修1ヶ月

これで、研修先の企業と、コミュニケーションが取れるだろうか？

(8)人材派遣協定の虚々実々 part 2

怪しいのは、ネパール側だけではない。昨年12月に、日本で研修生斡旋をしている NPO 法人代表に会った。彼は、1人のネパール人青年を日本の農家で研修させるため、非常に熱心に農家にアプローチしていた。なぜ、そんなに熱心なのか、腑に落ちなかったのだが、農家の方の説明で理解できた。

日本の農家は高齢化し、若い人手が無いので、「最低賃金月額7万円」で人が雇えるなら安いと関心を示す。その中から、食費や寮費が差し引かれるが、本国では2万円程度しか稼げない外国人労働者からは文句が出ない。しかも、早朝から夜までの長時間労働が黙認されている。

ところが、聞いてビックリ。同額の7万円を、その NPO にも支払わねばならないのだという。つまり、月額14万円ということになる。それでも、日本人を雇うよりは安いだろうと NPO は言う。

しかし、農家の方は、「工場の低賃金労働者とは違う。家では、ちゃんとした農業研修をやりたいのだ。それに、月額14万円の負担は、昨今の不況で不可能だ」と言う。すると、NPO 役員氏は、「研修ビザは2年間で、1年延長ができる。3年間のビザが出て、この賃金で雇えるのは、この制度だけです」と、高圧的だった。この NPO には、元労働省のお役人が天下りしている。と、いうより、最初から「研修」という名の低賃金労働者斡旋を画策したのは、労働省なのだろう。そして、それを餌にしている大きな機構と NPO が、多くのお偉いさんの天下り先として確保されているという筋書きのようだ。

日本のすばらしい農業技術を学んで、ネパールの人々に伝えようとしている青年を、そんな制度の犠牲にしたいくない。それにしても、そんな青年を「本当に研修させる」ためのビザは無いのかしら？

(9) またまた物価値上がり

昨年9月に、物価が軒並み30%値上がりした。公務員たちの給与が鰻登りに上昇し、それを基準にして、あらゆる料金が上がっていった。

労働者は、「これこれの学歴があるのだから、これだけの給与をくれて当然」と、まるで「権利」であるかのごとき論理がまかり通った。「学歴じゃなくて、どれだけ仕事ができるか、この会社にどれだけ貢献するかで評価する！」と、言っても、馬耳東風。ネパール社会では、通る論理ではない。

今年に入って、砂糖が払底した。売り惜しみに、店頭になくなってしまった。タイヤでバンダがあると、即刻ガソリンが上がり、LPガスが上がり、ガソリンスタンドに長蛇の列ができる。物価はそのまま下がらない。

電気なし、水なし、燃料なし、食品高騰……国民の「生きる」という基本的人権が蹂躪され、わけのわからない権利闘争に振り回されている。ネパール人は、なぜそこまで我慢しなければならないのか、それとも、あまり迷惑を感じていないのか、わけが分からない。

(10) これからの投資は、ワインと観光

財界人に聞いた。「どんな分野が、投資に向いているの？」「今後、政情が安定するので、ワインや観光が良いでしょう。」「水とか通信は、いかが？」「うーん、水は規模が大きすぎるし、コミュニティーレベルでは手間がかかりすぎる。ボランティアならいいけど、資金回収が難しい。通信は、既存の通信会社、例えばネパール・テレコムなどと組むしかないでしょう。よほど優れた技術を持っているというなら、その部分だけで参入ができるかもしれないけどね。』という、ご託宣でした。

5. 日常茶飯事情報

(1) 西洋歴

ネパールのカレンダーは太陽太陰暦といって、西洋暦の4月13日をネパール暦の正月として、1日だけ合わせている。ネパール暦の日にちの呼び方を「ガテ」といい、西洋暦は「ディン」という。ネパール暦は、日本の陰暦と同じように月の運行に合わせているので、行事日程は年によって半月近くずれてしまうが、日常生活は「ガテ」と「ディン」を併用して行なわれている。

南アジアの世俗国家になって以来、主要宗教の祝日、あるいは主要民族の正月を国家の休日とすることになった。バンダ+土曜日+ロサールなどという時には、3連休になって、いったいいつ働くんだろうかと、他人事ながら心配になる。

ネパールの多くの民族には、民族固有の暦があったのか無かったのか、分からないのだが、現在は、日常的にネパール暦と西洋暦を併用している。正月だけは民族ごとに異なるらしく、タマン族のロサール、グルン族のロサール、シェルパのロサールは別の日だ。今のところ、西洋暦の12月25日のクリスマスは西洋暦で休日になるが、ダサインやティハールはネパール暦で休日になる。しかし、西洋暦の1月1日は休日ではない。新聞もメディアも西洋暦を併用しているのだから、日常生活にネパール暦を使ったとしても、1年の最初だけは4月13日でなく、1月1日にしてしまったほうが便利ではないだろうか？最近、ビクラム暦といわれるネパール暦が、王制時代に定められた暦として、廃止を希望する声も上がっている。

(2) ナラヤンガート沸騰 バナナ・フェスティバル

ナラヤンガートは、土地ブームに沸いている。東西850kmのハイウェイ(牛も鶏もあるいているが)の、ちょうど真ん中にあたる交通の要所である。ここまでくれば、カトマンズまで、あと3-4時間の上り坂だ。タイヤで車のクラクションが最も賑やかな町だろう。

その町をゆったりと流れるナラヤニ川の川原で、毎年大きな祭りが開催される。観覧車が設えられ、舞台では踊りや音楽の演奏があったり、コメディアンが出てきたり。一方、巨大なトラクターや新車の展示、地元産のハチミツや薬草、苗木、射的などなど、実にたくさんの店がならぶ。熊手は無いけれど、日本の年末の西の市のような。それに、よくまあ、というほど人が集まる。遠くの川原は臨時駐車場となり、3日間で、そうしたな儲けとなることだろう。

そのフェスティバルに、今年はバナナ組合が参加する。昨年、ナラヤンガートを訪ねた際に、バナナ組合のメンバーに「ただ、生バナナを売るだけじゃなくて、チョコ・バナナとか、バナナのフリッターとか、簡単な加工で女性たちの収入源にしない。バナナは捨てる場所が無いのよ。バナナで一村一品運動をしたら」と、いくつかのアイデアを提案した。その後、バナナ組合で話し合い、今年からフェスティバルに参加することにしたそうだ。「日本のディディは、来てくれないだろうか？」と、私がカトマンズに居るとも知らずに、一

週間前になって連絡が来た。残念ながら、帰国日の 2 日後から始まるので、ナインシヨにしておいた。それにしても、呼べば、日本から来てくれると、思っているところが、可愛いというか、何というか・・・

このフェスティバルを仕切っているのは、実は、マオイストのバーダルである。彼の選挙区なのだ。彼に話を通すことで、無事に行なえると、地元民は安堵していた。

ちなみに、ナラヤンガートは、海外在住ネパール人協会日本支部長、日ネ協会理事で、BB 財団を設立し、有名な雑誌 Time にも掲載されたバワンバッタ氏の故郷だと、現地で聞かされました。

(3) スリ天国とツーリズム・ポリス

人口 260 万のカトマンズは、スリ天国ですって。もし、あなたがスリにあったら、どうします？

現場から電話をしても、警察は来てくれません。カトマンズ市警察(ハヌマンドカ)へ駆け込んでもダメ。地区警察(例えばニューロードならビサルバザール警察)へ行ってもダメ。警察は、助けてくれないところです。市民も、警察に絶対に関わらないから、証人にはなってくれません。

「ツーリズム・ポリス」へ行ってください。ラトナパークの傍にある、ブリクティ・マンダップへ行ってください。ビザを更新する際のイミグレーションや民族博物館、ツーリスト・ビューロー(NTB)の建物のあるところ、ピサバサ・キャンパスの向いにあります。そこで事故届けを出す。物品が盗まれたなら、その届け出証明書を出してもらい、保険会社に提出すれば、契約の範囲内で弁償してくれるでしょう。ただし、そう簡単には証明書を発行してくれません。財布、現金類は証明書をくれません。保険の対象外だからです。嘘をついているように言われます。保険会社と結託しているのかと怒鳴りたくなります。

だから、スリにはあわないように気をつけてくださいね。

(4) INGO は、格好良い肩書き

タマン大使は、大使になる前、国連関連組織の現地職員やアメリカの NGO の現地調査員をしていたそうです。「ランタン谷の調査のために 1 ヶ月間村中を歩き回ったこともあるから、ランタンの人々は自分を良く知っている。当時ホテル組合がなくて、高額な税金をとられていたのを、組合を作って、税金を安くする交渉をしてあげたりしました。ランタンへゆくなり、連絡してくれば、手紙を書いてあげますよ」と、お話しして下さったことがある。

日本では、NGO が民間のお遊びか胡散臭い団体として、就職対象になっていないし、社会的地位が認められていない。まして、大使が官僚や政治家、外務省のエリートではなく、民間の現地 NGO 職員だったなんてことは、あまり口外したくないキャリアと見做されるらしい。

ところが、今や、INGO 職員は憧れの職業、エリートの証明なのである。若者は、そのためにロンドンやフィリピンの大学院へ留学し、開発専門家として世界を飛び回る日を夢見ている。JICA のエリートたちもやはり。Informal Sector Service Centre (INSEC 国際的な人権 NGO) のように、職員をヘリコプターで僻地へ送迎するほどの資金力を持つ団体もあり、政府や国連と相互協力しながら活動しているし、エリート職員は、国連、政府、INGO と渡り歩く。バイタリティと豊富なフィールド経験こそ、外交官に必要な資質ということで、「INGO 勤務」は、出世の登竜門になっている。

(5) ネパール批判はタブー？

12 月 31 日に、ネパールのラジオ放送局で話をさせていただく機会があった。その中で、率直に、「カトマンズの住人は、ゴミ箱の中にくらしているようです。一人ひとりがゴミを捨てなければ、これほどまで汚れることはないはず」と、言ってしまった。観光を外貨収入源とするネパールでは、最悪の印象をあたえるからだ。しかし、マズかった。やっぱり、長年ネパールになじんでいるから、つい本音を言ってしまったのだけれど、「ネパールは、お釈迦様の生まれた国ですし、美しいヒマラヤの国ですから、本当に素晴らしい国ですね」と、言わなければいけなかったのね、きつと。外交辞令を飛ばして、正直すぎると、嫌われるよね。

(6) カトマンズで一番マオイストが多い地域は、どこですか？

彼は、しばらく考えていたが、「Kapan」と答えた。

カトマンズ市街の東北に位置する。空港の滑走路の突端が北を向いているが、その先がボドナート、その北がKapanである。最近、新興住宅と大きな仏教僧院が建てられ、目の前にカトマンズ盆地を囲む丘陵地の一つシバプリ山地の傾斜が見える。

ボドナート付近は、チベット人、タマン族、タライから出稼ぎに来たムスリムが多く、起伏の多い地形の谷間には、細い道路に沿って家屋が密集している。「Kapan」と聞いて、2007 年 4 月革命の 9 日間、リングロードのマハラジガンジ交差点の北方から、沢山の若者がカトマンズ市街へ向かって行進してきた写真を思い出した。

(7) ネパール人は豊かです

ネパール人も、バングラデシュ人も、「そこそこ食べてゆけるし、貧しくないよ」と言う。ポカラの学生寮に極西地域から来る学生たちは、毎年、新学期からしばらくの間、よく病気を患う。その地方では、比較的豊かな家庭の娘さんたちなのに、痩せているし、基礎体力が無い。寄宿先に住む田舎から出てきた少年も、よく熱を出して虚弱だった。そこで、食事に気を付け、栄養剤を与えたら 1-2 年で丈夫な体ができてきた。「ダル・バート」という、ご飯と豆汁、野菜炒めの食事は、健康的な食事なのだが、ビタミンCなどが不足しがちで、栄養の偏りが起こるのではないかと考えられる。

まして、貧しい家では、米食を腹いっぱい食べられないこともある。しかし、長年ネパールと関わっているが、「餓死した」という話を、聞いたことが無い。国立のパシュパティナート老人ホームでさえ、山盛りのダル・バートを食べていた。家の周囲には、家族の食事を賄えるくらいの菜園がある。いよいよ困窮すれば、周囲の誰かが食べさせてくれるのが当然である。旅行や嗜好品は買えなくとも、働かないから食べられないという話は聞かない。

「ネパール人は、貧乏じゃないさ。国が貧乏なだけだよ」「国は、貧乏と言っておかなければ、外国援助を貰えなくなっちゃうだろう。自分で稼ぐより、貰ったほうが簡単。豊かな国は、援助して当然だろう？」という。ちょうど、日本が「国は豊からしいけれど、個人は貧乏」というのと、対極にある。

じゃ、「ネパールの少女たちは、貧しくて学校へ行けないのです」と、涙ながらに訴える日本人は、何なのだろう？ネパールの「絵に書いたような貧しさ」は、わざわざ探してこないとお目にかかれない時代になったのだろうか？それならそれで、好ましいことではないか。仕事は無くても「食べられる」ことが先決だから。

(8) マオイスト支持の中身

TAXIの運転手さんに、「マオイストは、どう？」と聞くと、選挙前は興奮して、「こんどこそ、俺達のことがわかってくれる政府には。なに、王様なんていない！」と、まるで、プラチャンダになったかのように話す人が多かった。そして「まあ、良い国にするって言ってんだから、1 度やらせてみよう。他政党は口先だけで、どれもダメだったから」と、選挙を楽しみにしていた。選挙後は、鬼の首をとったように、喜んで居た。しかし、しばらくすると、「まあ、しばらく様子をみましょう」と、トーンダウンしてきた。昨今は、誰も意見を言わなくなった。「やっぱり、ダメだねえ」「期待していたんだけどねえ」と、楽天的に残念を口にだす人はいない。運転手のみならず、よほどの身内で無い限り、その話題はタブーなのだ。誰も口を硬く閉ざしてしまう。

現在、マオイスト支持者の半分は、「報復が怖いからYESというしかない人々」だという。マオイストを批判した女性ジャーナリストが崖から突き落とされた。12 月のバンダの際も、FNCCIの会長の工場が爆破された。マオイストは武器を持った政党だ。あらゆる職場に、親戚にマオイストの目が光っているように感じる監視社会である。楽天的なネパール人たちに見えるが、実は「コワイ」と言う。しかし、それは、民主主義ではない。民主主義のルール違反をしたのでは、自らの首を絞めるようなものだ。既にマオイストは民意を掌握できなくなってきていることが、「無期限バンダ回避」で証明されたと言えよう。

6. 都市事情

(1) タメル・デラシネたち

午後 11 時ころ、タメルには電気が煌々と灯り、どこから湧いてくるのか、若者達が集ってくる。午後 11 時に客層が入れ替わる、新宿歌舞伎町のような。ダンス・バーや、女の子のいるお店など、歌舞伎町ほど華やかではないけれど、タバタリのような場末でオジサン向けにお姉さんが肌をチラリと出す小料理屋とは違う。なんとすることも無く、毎晩同じ顔が集り、しゃべり、食べ、歌い、踊り……1 年でも 2 年でも、そうした毎日を送っている。1970 年代のヒッピーのように、薄汚い、独特の格好もせず、反体制というわけでもない。ATM へ行けば、お金に困らない。タメルにとっては、良いお客さんたちだ。

海外へ渡った家族と離れて、一人でネパールに舞い戻った若者。海外で教育を受け、英語は堪能だが、どこへ行ってもデラシネ(根無し草)。ディアスポラ(捕囚、離散家族)のように、被害者あるいは陰惨なイメージはないが、明るいともいえない。国籍はネパールだったり、アメリカだったりするが、どこの社会にも自分の落ち着ける場所を見出せないし、苦勞して自らの場をつくろうともしない若者たちである。私は誰？

海外出稼ぎブーム、中産階層の留学志向の結果、海外で生まれた子ども達は、ネパール語も民族語も中途半端で、読み書きはできない。両親の出身村へ行った事もないし、興味も無い。ハンバーガーとコココーラ、KFC で育ち、行きたいと思えば、海外の有名大学だって行ける暮らし。両親が住む海外の家とネパールを、気が向いたときに行き来できる。だが、どの社会でも当事者になろうとしない若者は、匿名のアウトサイダーという存在に逃げ込み、誰からも強制されるのを嫌う。

海外に出ることを「成功」と評価するネパール社会の落とし子なのか、一種の犠牲者というべきなのか。深

夜3時ごろになると、散ってゆく。そんな中に、日本の若者の顔もチラホラ見られる。

(2) ストリートチルドレン

「ストリートチルドレン(被雇用者ではない)」と「児童労働(雇用関係がある)」の定義が団体によってブレがあり、その境は「時々児童労働」という者も含めて、かなりオーバーラップしているように思う。夏の間にはストリートチルドレンの調査をしていたので、今回も気になって、街の様子を見た。①夏に比べ、圧倒的に人数が少ない。②10歳以下の年少者がいない。③女の子がいない。④母親の物乞いはいるが、赤ん坊を抱えていない、⑤赤信号で停止している車に新聞を売る子がいなくなった、という違いがあった。

カトマンズの冬は冷えるから、家へ帰ったのだろうか、どこかの施設に身を寄せているのだろうか、気がかりだった。男の子は路上の陽だまりで眠っていたり、18歳くらいになってもウロウロしているが、女の子は、父親らしき大人と廃品回収をしていたのを見ただけで、ストリートには見かけなかった。

こうした、季節変動は、当然あり得ることだが、統計には現れていない。カトマンズ市役所にも、ストリートチルドレンの担当部局(社会福祉課)があるのだけれど、実際にどのような仕事をしているのだろうか。

7. 教育事情

(1) 2009年度SLC

2009年春に、ゴルカ王朝の終焉にともない、ラナ時代から続いてきたSLC制度は2009年で終了すると聞いた。では、今後どうするのか、はっきりとしたアナウンスが無い。各開発地域ごと、あるいは各郡で、独自に、同様のSLCを行なうという噂もあった。しかし、地方自治体が機能していない状態では、各郡で実施することは不可能である。ところが、今年も、SLCの可否通知がポカラの学生選考委員会に届いた。

(2) School Sector Reform Plan (SSRP)

2009年8月に、教育省は、128頁に及ぶ新しい教育プランを発表した。SSRPlan(教育分野再建計画)と名づけられ、教育予算を大幅に増やし(大半が教員給与)、2009-2014年にかけての5ヵ年計画である。この計画は、以前の「教育5ヵ年計画」の後継であり、継続中のEducation for All (EFA 万人のための教育)、Secondary Education Support Programme (SESP 中等教育支援計画)、Community School Support Programme (CSSP コミュニティ学校支援計画)、Teacher Education Project (TEP) 教員教育プロジェクトが含まれている。

こちらを参照してください⇒ <http://moe.gov.np/new/>

EFAにおいては、ネパールを含む南西アジアの進展はすばらしい。2015年までに、全ての学齢児童を中等教育は少し無理かもしれないが、初等教育に就かせるという目標は、達成できるであろう。その背後には、社会の経済的成長が不可欠である。南アジアは、長いことアフリカのサハラ以南と同様に貧困率、非識字率、安全な飲料水普及率など、人間の基本的な生活条件が満たされない状態から脱却できなかったが、ここ数年は、インドのGDP成長率7.9%を筆頭に、ネパールでさえ3.4%の伸びを示している。こうした経済的余裕が、教育の普及に如実に現れている。現代の親たちは、子どもを学校に行かせたくないのではない。むしろ、両親達自身、学校へ行かれなかったことを劣等感に思い、ある時は言い訳にしている。

既に、今後の教育政策の中にもあるように、教師の訓練を含めて、「教育の質」が問われてくる。その次の段階で、教育設備ということになるだろう。

自分の村を見ていても、初期には「校舎を建てる」というハード援助は、それなりに村人に大きなインパクトを与える。しかし、その後、「やってあげる」「やってもらう」ではなく、自分達でやれるように仕向けるソフト援助が必要であり、援助の成否は、フォローアップ次第である。もう、ネパールの人々は、自分でやってゆけるだけの経済力をつけている。ある面、日本より豊かかもしれない。しかし、「貰う」習慣を脱却するには、村に説得力のあるモチベーターがいなければならない。従来の、仲介業で豊かになるファミリーNGOではなく、村の将来を見据えてリーダーになろうとする人材を発掘すること、育てることも重要な援助であろう。

インドのように、10年後に、どれだけの留学生がネパールに帰ってきて企業家、教育家になってくれるだろうか、楽しみでもあり、不安でもある。

(2) 奨学生・里親

日本からの援助は、「子どもの教育」「女性」「環境」「医療」は向けられることが多く、中でも「女性」は「教育」「人権(売春、DVD)」「経済的自立」が主要テーマとなり、「子ども」は「就学」「ストリートチルドレン」「児童労働」がテーマとなっている。いずれも、国連関係機関で取り上げられているテーマであり、局地的に対処できる側面が多い。ただ、ほとんどのNGOは、現地に住み込みで活動することはできないので、ネパール人を介して資金援助をする形をとることになる。

そうした中で、就学促進するための奨学金制度、一人ひとりの子どもの成長を見守る里親制度を採る団体が多い。それは、子どもの成長を見られる、資金提供側へも喜びを与えることもできるからであろう。だが、奨学金を、いったい幾らにしたら良いのか、何年間にしたらよいのか、その後の効果はどうなのかなど、体験報告と、効果の分析が団体外部に知らされることは、殆ど無いので、試行錯誤、手探りではじめることが多い。そこで、3つの事例を挙げておこう。

①女性教師育成プロジェクトである。都市から離れている地域で、女性教師のなり手が少ない。女性の教師がいれば、親は安心して女生徒を学校に送り出せる。などに理由から、戦争前の日本で行われた「師範学校制度」を模し、遠隔地で教師希望者を募り、全寮制、費用支給制の女性教師を年間10人育成する。キャンパスの中に学寮を建て、寮母の指導のもとで、衣食住完備の恵まれた寮生活をおくっている。キャンパス(短大レベル)の教育学部で2年間の教育を受けている間は、月額3000Rsの奨学金が与えられる。また、卒業後3年間教師として働く義務があり、その間は月額5500Rsの助成金が支給される(違反者は全額返却する)。これでも、キャンパス・チーフは卒業後の支給額が少ないと常に増額を要求してくる。学生は、要求した支給額が受け入れられなければ、受け取りサインをしないと、団体交渉になったことがある。一方、各地の小学校で働いている卒業生は、村雇いの臨時教員(1500Rs程度)より、遥かに良い収入を得て、誇りをもち、懸命に働いている。毎年フォローアップ研修会を開き、現地訪問を重ね、彼女等が政府の正規の教員として1日でも早く資格を得て自立することを目ざしている。もし、結婚・出産・引越などで、故郷で働けなくなったとしても、地域の女性リーダーとして活躍してくれることを願い、当初より、10年間のみのプロジェクトと期間を限定しているが、日本人好みの「絵になる」プロジェクトで、資金の申し出が多い。

②女性の自立支援のため、職業訓練所建設のプロジェクトであった。縫製用のミシンを買い、縫い物をはじめたが、市場で売れるレベルのものではない。その内、地域の女の子の教育支援にプロジェクトが拡大し、里親制度を始めた。当初は、奨学金の効果もあり、現在では小学校へ行かせない家庭が無いほどになった。ところが、いつの間にかNGOを始めた人は有名人となり、家族・親戚の一族経営事業になってしまった。資金は潤沢であるが、最初に期限を限っていたわけではなく、支援側は高齢化してきた。これから先、どうしようかと悩んでいる。

③校舎増築支援プロジェクトだった。その建設資材の節約によって、中学を卒業したけれど、その先に行けない子ども達に、小規模の奨学金を始めた。村の必要性から生まれてきたアイデアで、1人3ヶ月で800Rs月額3200Rs(約6000円)だが、教育の補助になっている。①にくらべ、十分の一弱の金額だが、先輩が後輩の学習指導をし、被抑圧民族の村ではじめての女性教師が誕生したなど、村民全体の意識改革になった。奨学生が村のリーダー青年の役割を果たしており、村の子ども達は、ほぼ全員が小学校・中学校へ行くようになった。自発的に同窓会が組織され、ITの指導など助け合いが行なわれている。次は、経済的自立方策を彼ら自身で考え、次世代を育てようとしている。地域的まとまりがあるので、互いに連携が取り易いのも利点となっている。NPOは、過干渉せず、相談役に徹し、彼らの自主的な活動を、最小限に手伝う程度である。日本側からは、年間10~20万円程度の支援であり、無理の無い範囲で行っている。

8. 海外移住・労働事情

(1)ネパール人が、今どこへ出稼ぎにゆこうとしているかを見れば、世界経済の動向がわかる。外労働者数は人口(2900万人)の10%に及ぶと聞いたが、インドには、ビザが不要なだけに、1200万人レベルの出稼ぎ労働者が行っているという。ネパール人にとってインドは外国という感覚がないから、村からカトマンズへ出稼ぎに行くのと大差ない。農閑期には、村の男性が集団で毎年インドの同じ地域へ麦刈りに行くという場合もあるし、ダーラヴィーのようなスラムを仮宿にして働く、あるいは夜警として働くなど、さまざまだが、定着してしまう人も少なくないのだろう。日本向けには、日本語学校熱がさがり、コック ビザで入国する人、その後、「妻です」という女性たちが次々と入国する。

2008年度末の新規出稼ぎ出国者数は、22万9千人で、在外出稼ぎ労働者の10%程度が新規労働者として出てゆくのであろうか。年間送金額は1480億8800万Rs、GDPに占める送金額率は17.4%。観光収入110億Rs(名目)、55億Rs(実質)だった。2008/09の国家予算は2361.5億Rs。数字に弱いから、単位が違っているかな？

<http://www.np.emb-japan.go.jp/jp/pdf/nepaleco2009.pdf>

9. 住宅事情

(1)中産階層の住宅購入ブーム

カトマンズは建設ブームで、行くたびに大型のショッピングモールが建ちアパートはどんどん高層になって行く。5年前くらいは、バロアタール、パニポカリ、カランキ、ボドナートなど市内に高級マンションができ、完成前に完売し、投機対象物件として、1ヶ月ごと価格が上がっていた。現在は市内に大きな土地を入手できなくなり、コロニーと呼ばれる50戸～100戸規模のセキュリティー完備の郊外型高級分譲住宅を Civil Homes (I.R.Tamang)、Valley Homes (Suraj Joshi) 等が建設販売している。コカナ、ゴカルナなど、カトマンズから車で30分～1時間の穏やかな田園に、突如としてコロニーが出現している。中には、水道、電気、電話、排水設備、広い敷地内道路、駐車スペース、スーパー、スイミングプール、ATM、ジム、コミュニティーホール、パーティーホール、映画館を備えているコロニーもあるようだ。

一般的には3階建だが、傾斜地の場合には地下2階、地上3階という造りもあり、3ベッドルーム、3バスルーム、リビング、ダイニング、キッチン、神室、屋上が標準的だ。日本のような“ウサギ小屋”ではない。街中の騒音、公害を避け、一定レベル以上の経済力を持った人々、社会的成功者のコミュニティーは快適かつ安全である。人工的に、ブラーマン、チェトリ、ネワールの富裕な中年層が安心して暮せる“国”が出現することになる。コロニー建設地のポイントは、「ヒマラヤが美しく見えるロケーション」というのが面白いが、国の住宅建設計画の無策が、民間業者の買い漁り、買占めを可能にし、景観をズタズタに壊している。

(2)あなたは、住宅ローンを組めるか

Indreni Apartment (Deepak Man Scherchan)は Bhatbhateni に、Ansal Chaudhary Developers は Sanepa などカトマンズ市内に超高級・高層マンションを建設しているが、完成前に価格が跳ね上がってゆく。半分は投資目的で、実際には住まないというが、人口の 10～15%の中産階層の貪欲な購買意欲を、Standard Chartered 銀行、Kumari 銀行、Everest 銀行、Laxmi 銀行、Himalayan 銀行、Kathmandu 銀行は、年利 7.5%～9%、15年毎月返済という住宅融資パックで支援している。もし、1000万 Rs のローンで、毎月10万 Rs の返済をするとして、金利 7.5%なら、総額 5,742 万余 Rs、9%なら総額 8,553万 Rs の返済額になる。

2007/08年度産業別GDP構成比率 (Economic Survey 2007/08年版、MoF)を見ると、1位農林業 (32.1%)、2位小売業 13.6%、そして、第3位が不動産業 9.9%である。いかに土地バブルであるかが分かるであろう。土地を持っている者が、土地を買い漁り、お金持ちしかローンは組めない。ますます貧乏人は土地を得られなくなる。1990年の民主化後、1992年の経済自由化以後、ますますその傾向が強まってきた。

せつかく法的に女性にも、兄弟同様の遺産相続権が認められたのに、土地を巡る遺産相続係争が増え続けている。皮肉なことだ。 <http://www.np.emb-japan.go.jp/jp/pdf/nepaleco2009.pdf>

10. 女性情報

(1)やるき満々：中間層主婦パワー

年末年始のカトマンズで、「縫い物講習会(雑巾と三角巾)」、「お料理講習会(コロッケと鶏のから揚げ)」、「フラワーアレンジメント講習会」を、中産階層のご婦人を対象に行なった。それぞれ、お車も持ち、邸宅に住み、お店の経営者もいる。侮る無かれ、このご婦人たちのパワーはすごい。1990年の民主化でサリーを着て、デモの先頭に立ったご婦人方とも違う、マオイストのデモに参加した若者とも違う、地に足が着いた女性たちだった。

「古いサリーやハンパな布を捨てないで、利用しましょう。古いタオルで、手を拭き、テーブルを拭き、子どもの鼻をかんでは、いけませんよ！自分でいいいに縫った布巾は、丁寧に扱いたくなるでしょう。用途ごとに布巾を使い分けましょう。台所は清潔が一番ですよ！」

「揚げ物は、やや低温で1度揚げ、蓋をして余熱を使って中まで熱を通すと、エネルギーの節約とともに、ジューシーになります。その間に、テーブルやサラダ、お皿を整えて食べる前に、やや高温でサット揚げて色づけをします……」

「花は、花屋で買う必要はありません。庭の花をアレンジすることが、活花の基本です。花の扱い方と、基本形を覚えれば、難しくありません。女性とおなじように、花の個性を一番美しく見えるように、ちょっと手を添えるだけです。丼でも深皿でもよいのです」

まあ、そんなわけで、年寄りの知恵を伝えただけですが、これが、大うけでした。フラワーアレンジメントは何回かやりましたが、食べ物が最も関心が高かったです。

その結果、「コロッケ1個とチキン2個にサラダで、100Rs」、「私たちの地区にも花屋を開こう」と、さっそくビジネスを開始するという。その素早さ、楽天的なエネルギーに感心してしまった！日本のように、保健所で検便をしなくちゃ、お餅つきもダメ。食品衛生法の届け出だ、ライセンスだなんて、面倒なものは無いから、

明日からでも商売をはじめられる。女性たちは、そうした収入活動に、とても敏感で行動力がある。講習直後に、コロニーの中に、集会場を建て、そこで各種講習会ができるような設備を備えて欲しいと要望書をコロニーのオーナー建設業者に提出して、OKを得られたという。スバヤイ！

そこで、起業する場合のキープポイントとして、①仕入れの重要性(販売価格の中には、材料費、人件費、交通費、通信費、事務経費、電気光熱費、賃貸料等、広告費、接待費、様々な経費が含まれ、利益を何%ですか、しっかり計算すること)、②新鮮であること、③残り物(ロス)を出さない計画性と残り物の加工技術、④マンネリ化しないための勉強とマーケットリサーチ、⑤リーダーの責任と継続性などなど、基礎知識も話した。最後の、「リーダーの責任と継続性」が、最も難しいところなのだが、ご婦人たちは「やってみましょう。利益が出たら、みんなでピクニックに行きましょう！」と、何とも明るい。そう、1歩踏み出して、やってみる行動力が一番大切なこと。日本じゃ、できないもの。

この中産階層のご婦人たちが、カトマンズ人口260万人の15%あり、この階層を動かすことが、女性開発の最短路線であろう。上位階層は、今までの権益に固執するか、頭と口ばかりで仕事をする。底辺の人々は、抑圧された力を持っている。女性国会議員が33%を占め、21%がダリット出身というが、なかなか社会全体のコンセンサスを心得てリーダーになるには時間がかかる。それに比べ、中間層の女性たちは、政治にこだわらず、社会に参加できることが楽しいし、自分たちの可能性を知ることが嬉しくてしょうがない。

革命も仕事も、深刻すぎては続かない。ネパール社会の真ん中は、すごいパワーを持っている。

(3) マオイストの女性政策(寡婦との結婚、ダリットとの結婚)

2009年7月に、マオイスト政府が打ち出した目玉政策で、寡婦とダリット(低カースト)と再婚する場合、カップルに5万ルピー(約6万円)と10万ルピー(12万円)の補助を与えるというもの。

一見、カースト打破、ダリット優遇、戦闘で寡婦になった女性の救済のように見えるが、WHRや、ダリットや寡婦の女性を含む女性人権団体からは、「疑問、懸念、チョット待て」の声がかかった。

- ① 補助金目当ての結婚詐欺で、再度男の犠牲になる可能性が大きい。
- ② マオイストも、「女は結婚しなければ一人前の人間ではない」と考えているのか。
- ③ 結婚は個人の自由であり、お金で推進されるものではない。
- ④ 階層や民族の異なる結婚が、家族全体に与える影響、嫁の立場、子どもの処遇、夫婦の上下関係など、DVや性的虐待につながる場合が少なくない。
- ⑤ 結婚することで女性の人権が補償されるとは限らない。かえって、差別が見えなくなる。
- ⑥ 結婚だけが、女性の幸せというより、ネパールでは辛いことのほうが多い。寡婦の経済的自立支援策を講じ選択肢を広げることが先ではないのか。

その後、ダリットや寡婦の結婚が進んだという話は聞こえてこない。このような単純な政策で女性が救われると考えることが悲しい。ネパールも日本も、男尊女卑は、DNAのように沁みこんだものなのだろうか。

(4) サリーと生理

昔、日本の女性は着物の下に腰巻をしたが、パンツははいていなかった。同様に、ネパールでも、サリーの下は、ペチコートだけだった。ジャプー(ネワールの農民階層)は、厚手の手織り木綿サリーの下は、ペチコートもつけない。そのまま農作業をしていた。では、生理の時、どうしていたのだろうか？着物を着ていた日本人と、サリーまたは巻き布だったネパール人と、同じような過ごし方をしていたようだ。

日本の農村には、「月小屋」があった。生理中の3日間は不浄とされ、火、水、神に触れることを禁じられていたから、村外れの小屋で生理中の女性たちが集り、自炊していた。女性差別という見方もあるが、辛い嫁の仕事から解放される生理休暇であり、女の知恵を教えてもらう社会教育センターでもあった。

ネパールでは、「母親が使い古した木綿サリーを捨ててはいけない」という言葉がある。当て布(布ナプキン)は、使い古した木綿サリーを、1.2m(サリーの布幅)の正方形に裂き、無縫製のまま折りたたんで当てる(フランスでは、使い古したナプキンを使った)。以前は、全後をサリーに挟んだ(T字帯風)が、現在は普通のパンツが普及している(生理用パンツは販売されていない)ので、経血の量に応じて厚さをかえて使うが、工業製品のように薄手ではなく、1日に何回も替えることもない。都市部では既に生理用ナプキンが販売され、若者は使っているが、中年以上の女性は、まだまだ当て布を使っている。

日本の女性も、ネパールの女性も、昔は腰底筋が発達していて、経血を膈内に溜めておき、おしこのように排泄することができたようだ。だから、たまに洩らすことがあった。着物の後ろが汚れたのを、「日の丸」と言って、女性としては恥だったようだ。ただ、田舎の貧しい農家では、主婦が自分のために腰巻1枚買うお金を持たされなかったから、年に1度行商が回って来ると「お父^とう(夫のこと)、腰巻1枚買ってけろよー」と、ねだっていたと、茨城に疎開した母の話しを聞いたことがある。

バフン・チェトリ、ネワールは、初潮の儀礼が複雑であり、ケガレを避けるため、生理中の女性は山羊の小屋など、家屋の外で過ごさねばならないし、所によっては、村の中心部へ入れないこともある。しかし、タルー族もタカリー族も、生理は自然のことであって、ケガレではない。初潮の際も特別な祝い事はしないとアンケートに書かれていた。また、女性自身が、他民族の慣習を知る機会が無いまま、自民族の慣習に従ってきたことを、驚いていた。

その内、まとめた本を書きたいと思っている。

(5)冬の漬物づくりと“マンシールコ パニ”

マンシール月(11月中旬～12月中旬)は、ダサインやティハールの大きな祭りが終わり、カトマンズがぐつと冷えてくる頃だ。このときに、各家庭ではガラスの瓶に自然の水(マンシールコ パニ)を入れて、2-3ヶ月ほど、屋上に置いておく。朝晩は5度くらいに冷えるが、昼間は20度以上に上がる。こうして作った水を、漬物水として使う。ミネラルウォーターでは、いけないのだそうだ。多分、水の中に適度な発酵菌が育つのだろう。これで漬けると、やわらかな酸味を帯びた漬物ができる。古漬けの味だ。これに、干し大根やグンドルックを戻して、マスタードシード、菜種油、唐辛子などを入れて密閉し、1週間ほど屋上に置いておくと、おいしいアチャールになる。同様に、材料を替えて、さまざまなアチャールをつくる。

ネパールも日本も、冬は漬物の季節。ネパールで白菜の塩漬けを作ってみた。日本の海の塩とヒマラヤの岩塩では塩味の効きかたが違う。岩塩のほうが甘いように感じた。

(6)グンドルック(乾燥野菜)

ネパールの台所からは、ナマゴミがほとんど出ない。全て乾燥野菜にして、様々な料理に利用しているのだ。大根の葉、カリフラワーやブロッコリーの茎や葉、カブの葉や高菜の黄ばんだ葉、そばの葉、菜の花の茎、葉など、どんな野菜でも良いのだが、繊維が強いほうが良い。枯れた葉も捨ててはいけない。これらを、生のうちに4-5cmに切り、できれば敲いて繊維をほぐしてから、シートに広げて、水を打って3-4日天日に干す。夜は取り込む。その内に少々酸味を帯びてくる。この段階で、チャーハンなどに入れると、抜群に美味しい。保存食だから、さらに乾かすと、干からびて黒い切り干し大根か、乾燥したゼンマイのようになる。山の人々にとっては、大切は冬の野菜になる。最近では、乾物屋さんでも売っているが、やはり主婦が自分でつくるものだろう。

ツクチェでは、人を雇って8月頃の蕎麦の葉を摘み、中庭に天日干しをしてグンドルック(乾燥野菜)をつくっていた。最近では、「タカリー・レストラン」がボカラ、カトマンズ、ムグリンなどに増え、スクティー(山羊、ヤクなどの干し肉=これも初冬につくる)とグンドルックのトロツとしたスープに、蕎麦掻きを入れたメニューは、体が温まり、冬のご馳走になる。

日本のスーパーや、八百屋では、たくさんの野菜が捨てられているし、家でもブロッコリーの芯を食べないのが普通だが、干して繊維を砕くことで、良い食物になる。便秘解消に最適ではないだろうか？マンションのベランダでもできるので、ぜひ、試してほしい。

日本でも、戦争前の家庭では、生ゴミを出すのは、主婦の恥だったと、母から聞いたことがある。

(7)ザボンの食べ方

「果物や野菜に、油をかけて食べる」・・・これは、日本の料理には無い手法。冬に不足がちなビタミンCとAを、上手に取る方法なのかもしれない。庭先のボガティ(ザボン)を取ってきて、身を取り出し、これに塩、胡椒、マサラを入れてよく混ぜる。そこへ菜種油を熱した中にメティ(フェネグreekシード)を黒く焦がしたものを、ジャーッと注ぎ入れる。かなりな量である。ヨーグルトを混ぜてもよろしい。砂糖を加えてもよろしい。冬のおやつを、家族で楽しむ(名前を忘れた)。ついでに、皮を湯がいて砂糖漬けなどつくっておくと、香も良く、お菓子を造る際に使えるし、ヨーグルトと混ぜてもおいしい。ホットレモン・ハニーのようにして飲めば、咽喉に効く。

5cmに輪切りにした皮付き大根を、さらに筒型に8等分する。塩を混ぜて、水出しをする。粗摺りの白胡麻をつくり、キュッと搾った大根にまぶす。そこへ、菜種油を熱した中にジラ(クミンシード)を入れ、バチバチと爆ぜるほど熱してきたら、大根の上にジャツとかける。しばらく馴染ませておくと、ムラコ アチャールになる。